北海道新聞 2013 年 01 月 29日号
北海道新聞2013年1月29日

チセヌプリスキー場存続活動

【蘭越】国際的スキーリゾート、ニセコの発展の一翼を担い、今季限りで休止が検討されている町営のチセヌプリスキー場。存続を求める署名活動も起きており、活動の中心となって奔走するプロスキーガイドの市村剛志さん(49)＝札幌市＝に、同スキー場の魅力や存続への思いなどを聞いた。（及川靖）

自然豊かなチセヌプリスキー場

プロスキーガイド 市村さんに聞く

自己責任 学ぶ場必要

「チセヌプリスキー場は自己責任の大切さを学ぶ場」と話す市村さん

――なぜ署名を行っているのですか

「ニュージーランドで20年、チセヌプリで16年、プロのスキーガイドとして活動してきて、チセヌプリスキー場とスキーヤーたちのすばらしさを実感して、この環境を守らなければと感じたからです」

――具体的には？

「このスキー場には自然が残され、パトロール員も常駐していないので、自己責任で滑らなければなりません。そのためスキーヤーは雪の状態や危険な場所などの情報を互いに交換しながら、スキーを楽しんできた。自分で考え、自己責任で行動することを学ぶ場として、このスキー場は非常に有意義です」

――自己責任には危険も伴いますが

「スキー界には、自然の中で子供たちの感性を育てる『雪育』という考えがある。さまざまな体験を通して、危険に対する感覚も磨かれていくと思う」

――ただ、施設は老朽化し、維持には多額の金がかかります

「町の財政が苦しいのは分かるが、この環境を守ることも大切。私たちが声を上げることで、町の方針が変わったり、企業が買収に動いてくれることなどを期待しています」

チセヌプリスキー場 チセヌプリ（標高1134㍍）の南斜面に1967年にオープンした町営スキー場で、圧雪コース1本、リフト1本。原生林に囲まれた自然のゲレンデは愛好者に人気があるが、利用者の減少や施設の老朽化が進んでいる。町はリフトのワイヤ張り替えなどで、2013年度から3年間で計1億7千万円の経費がかかるとしている。山麓の温泉「国民宿舎雪秩父」を取り壊し、日帰り施設を新設することも検討されている。